

大地

25号
1996. 2. 25
真宗大谷派 浄国寺
☎ 23 5724

俳句 七句

山崎 睦

年新なれどこの身はこのままで

鏡餅寒九の水に沈めけり

遺徳煮を炊いて家内のお取越

御絵傳を掛けてお講の用意済む

仏壇の灯をゆらしけり隙間風

木犀の薫り継ぎゆく家中道

落葉焚隣へ煙詫びもして

新しい年に

山崎 隆 昌

昨年随分忙しい日が続いた。勤務先の老人ホームで新しい事業がいくつか持ち上り、僕自身そのことに深く関ったためである。新しいことに取り組むことは、それなりに夢があり興味深く、何となく心躍るものがある。

しかしあまり忙し過ぎると疲労感が蓄積し、まわりが見えなくなり、うつ状態になる。そんな躁うつ、の繰り返しが昨年の状態だった。さて、このような自分に少し反省し正月に年賀状を書いた。生来の筆不精と忙しさにかまけて暮には書けなかつたので、文字通りの年賀状である。

年賀状には例年、自分がその時に感ずる言葉を記している。いろいろ考えて書いた今年の言葉は次のものである。

『人間が機械になることは避けられないのであろうか』

(渡辺一夫)

厳しい状況の中、人々が機械化されることに抵抗し続けた

いと思います。

ちようど冬期休暇で大学から帰省していた長男にこれを見せた。彼は、ニヤッと笑ってこう言った。「正月早々暗い年賀状やなあ。しんどいで、こんなもんもろたら」チクショ、何を偉そうにぬかすと思いつつも、そうかも知れぬ、いやそうだろうなアと自分でも思った。

しかし今更変えるのもシヤクなのでそのままコピし、暗い年賀状を遅ればせながら出した。

渡辺一夫のこの言葉は「ユマニスト渡辺一夫を読む」(大江健三郎著)にあったもので、いわゆる孫引きである。

この「機械になること」を強く感じたのは、一連のオウム事件である。ここでの「機械」ということは、自分を見失って組織の一部となることを言うのであろう。組織というものは随分やっかいなものである。生物はその本能として集団の本能があり、組織を無くしては生存できないという。植物は勿論、人間もその例外ではない。夫婦や親子による家族から、会社あるいは国家という組織まで。

組織はその組織に属する人を守り保護すると同時に、二重にも三重にも拘束する。そして次第に自分を見失い組織が全てに優先されてくる危険があるのである。

そして僕もそのような状況に在るのを強く感じていた。

マスコミの発達、特にテレビの発達は否応なしに大量の情報を提供してくる。この情報なるものは自分を明らかにすることにではなく、むしろ判らなく見失うことに役立つようである。一般社会から一見、隔絶状態にあったオウム真理教団は、その本質においてテレビ社会そのものではないかと思う。

しかしテレビは観ていれば実際面白いし止められない。やはりテレビを観ている自分を更に見直すことが必要であると思ひ、悶々とする毎日である。

この組織のことについて、詩人の谷川俊太郎は、ブラックユーモアに溢れた「大小」という詩を書いている。

小さい戦争やむをえぬ
 大きな戦争防ぐため
 小さな不自由やむをえぬ
 大きな自由を守るため

一人死ぬのはやむをえぬ
 千人死ぬのを防ぐため
 千人死ぬのもやむをえぬ
 ひとつの国を守るため
 大は小をかねるとさ
 量は質をかねるとさ

去年は随分忙しい日が続いた。さて、このような自分を少し反省した本年は、どのように自分を見直していくことになるだろう。

東山魁夷展

昭和町 鹿 住 春 乃

十月もあと僅かで終ろうとしている朝、高田発、五時五十二分の電車にとび乗った。信濃美術館に、東山魁夷米寿記念展を観るために沿線の山々は紅葉の盛りである。漆の朱がひと際目にしみる。長野駅着、中央通りは早朝のため、人影もまばら。仁王門、山門をくぐり、善光寺本堂に詣る。

堂内は僧侶の読経の音が響き、晨朝の勤行が始っていた。礼拝の後、庭園をめぐる。多くは苔をかかげる山茶花の中に、

一重の淡い紅の花もちらほら見えて、心が優しくなってくる。ゆっくりと一巡して、城山公園内にある信濃美術館へ。園内の噴水が朝の光を受けて、小さな虹をつくっていた。七色のプリズムが夢のように美しい。花時計がゆったりと廻り、人馴れした鳩が足許に寄って来る。

気がつくと開館十五分前、慌てて三十人余りの列の後方につく。九時、扉が開かれて入館、先ず最初目にとび込んだのが、昭和二十二年の第三回日展出品作品で特選の「残照」さすがに美しい。政府買上げとなる。更に昭和二十五年の「道」によって、風景画家として、画壇に認められるようになる。

昭和三十一年、野尻湖と黒姫山を大胆な色彩で描いた「光昏」は、日本芸術院賞を受賞、そして「秋翳」「青宵」「暮湖」「青響」とつづく主要作品の殆んどが、青の旋律を奏ではじめる。

続いて東宮御所に「日月四季図」を制作、さらに皇居吹上御所のために、猪苗代湖の「万緑新」を描く。このように世に認められるにつれて、公的な仕事も増えてくる。

そんなあけくれの中で多忙に追われて、一番大切なものを見失ってきてはいないか、との反省から、昭和三十七年、北欧の旅に出る。予想を越えた深い森の静寂、スオミヤ、フイヨルドの壮麗な眺め、清潔な町のたたずまい、短い夏を惜しみ、花を飾る人々の暮し、ここで「湖静」「冬華」「白夜光」と言った大作を次々と描いている。旅から戻って今度は、京都に対し、日本の美に対し、いっそう新鮮な魅力と、感動の高まるのを感じ、深い愛着と憧憬をもって、京都嵯峨野の「月篋」を、紺青に暮れてゆく東山を背景に、空に浮かぶ月と繚乱と咲き匂う丸山公園の枝垂桜をテーマに「花明り」を、詩情豊かに描き上げている。「曙」「春静」「北山初雪」「年暮るる」も、京都への想いをこめた作品である。

まだまだあげれば、きりが無いほど私の胸の琴線に触れた代表作は数多くあるが、割愛して、唐招提寺障壁画展覧会場へ。

昭和四十六年六月、若葉の美しい季節に画伯はひとり開山忌の唐招提寺を訪れた。御影堂の鑑真和上像を拝し、幾多の困難をのり越

えて、日本にたどりつかれた和上の信念に想いを馳せ、この障壁画の制作を引受ける決心をする。長い道程となることを承知の上で。

今回のこの東山魁夷の米寿記念展にあたり、唐招提寺は山外不出の貴重な障壁画出品を快く承諾された。尚御影堂障壁画を発願された森本孝順長老は、九十二歳の天寿を全うして、遷化されている。

先ず会場に一步足を踏み入れた途端、私はあっ!!と息を呑んだ。唐招提寺の晨殿の間を再現した襖に、緑紺色の大海原が広がり、大きな波が打寄せている。北側十二面の真中二面に、黒い大小の岩が二つ、大きな方の岩の上に青々とした松が、岩を這うように、しかし毅然と立っている。波は白い水泡を広げながら、続く上段の間との境をなす四面の襖にたゆとう、これが画伯畢生の「涛声」か：言葉にならない感動で、私は暫くその場に釘づけとなった。いつ知らず涙を零していた。

次に上段の間は、雲畑のなかに山の稜線が浮かび、脇床の小襖には一羽のほととぎすが飛ぶ。「山雲」十面である。続いて鑑真和上の故郷である揚州、瘦西湖畔の柳

を描いた「揚州薰風」二十六面。更に「黄山晓雲」八面、「桂林月宵」八面とつづく。究極の水墨の世界である。

障壁画六十八面、完成までに十一年が費されたと言う東山芸術の真髓を、心ゆくまで拝観させて頂いた。かつて覚えたことのない深い感動で私の心は濡れていた。この「祈りの画」は終生忘れることはないであろう。私は去り難い想いで展覧室に深く頭を垂れ、会場を辞した。

※鹿住春乃さんは昭和町在住。新井称光寺さんのご門徒ですが縁あって浄国寺境内に夫君と愛娘さんの眠るお墓があります。信心篤く、静かなお人柄を偲ばせるにふさわしい原稿を寄せて下さいました。

八月の永代経、十一月の報恩講には、お磨きと台所のお手伝いを申し出て下さって欠かさずお手伝いして頂いております。

鹿住さんからの原稿は、実は昨秋からお預り致しております。ひとえに私の怠慢から失礼を致しました。改めてお詫び申し上げると共に、厚く御礼申し上げます。

残念ながら私は魁夷展を見逃してしまいました。鹿住さんは二度も足を運ばれたそうです。どうぞ御味読下さい。

シヨック・シヨック・シヨック

山崎 慎子

シヨック・その一

ひとまわり年下の友人家族と温泉に行った時のことである。その友人には十才を先頭に、六才と三才の女の子がいる。

宿に着いて一服の後、男組と女組に分かれて、早速温泉に入った。海辺の温泉は心もち塩味がして、熱めのお湯は身も心も全て解き放つてくれるようで実に気分爽快である。頭の中から足の先まで丹念に洗い、すっかり良い気分になって、子供達を先頭に三階までの階段を上って行くその途中、宴会帰りのおじさんにすれちがった。子供を見つけたおじさんが「かわい、ネ」と声をかけ、母親の姿を見つけて「お母さんと一緒なのかよかったネ」と言っている。やゝ遅れて後に続いた私の姿を認めると「あゝ、おばあちゃんも一緒だったのかね」：：：とっさに「おばあちゃんだなんてシヨックにうちのめされて、そ

の声は力なく弱々しい。おじさんは酔眼をしばしばさせて「あゝ失礼、おねえちゃんだったのかね」時、既に遅し。ノックアウトとまではいかないが、かなり強烈なパンチであった。その後、部屋までの足どりが力なくふらふらしていたかどうかは知らないが。

シヨック・その二

その翌日。あるお店に買物に出かけて、野菜その他を求めて早々に帰宅して坐ると間もなく、そのお店から電話が入った。

「山崎シンコさんのお宅でしょうか。駐車場の所に財布を落して行きましたよ。」

最後の品物を求める時、もう小銭だけしか残っていなかったな、空財布を落して来るなんて恥しいと思いつつ受け取りに出かけた。「大金が入ってたよ」と係の人が笑いながら言う。アレ？そういえば少し前に参加した研修会の旅費を渡されて、封筒のまゝ入れていたのだった。温泉に出かける時、もしもの時のためにと、引き出しから財布に移したのである。これもやはり軽いシヨック。物忘れは日常茶飯で、とり立てて言う程の

こともないから。

シヨック・その三

その帰り道、ついでだから本を見ようと思いついて本屋さん立ち寄ることにした。冬には珍しい暖かいお天気と、あたふた歩いたせいですっかり汗ばんでいた。おもむろに上着を脱いで身軽になって店内を歩き廻ること二・三十分。狭い店内だったから気のせいだったのか、何とはなし視線を感じるような気もしたのだが：：：夜も更けてお風呂に入ろうと思いついてセーターを脱いでシヨック。黒いセーターの背中の中真ん中に白いホッカイロがぴたりくっついていて。朝の起きがけに、少し寒気がしてくっつけたのだった。あゝあ、何たることを。シヨックは、もう当分要らない。

あとがき

いつもお詫びばかりですが、久々に「大地」をお届け致します。 「めでたさも、中ぐらいなりおらが春」と詠んだ一茶が、どうゆう思いだったのか知る由もありませんが、身の丈そのまの正月を見つめていたのかな、と母の句を読み思いました。 (慎)